

ボルノーにおけるフレーベル幼児教育思想の一考察

A Study of F. W. A. Fröbel's Philosophy of Infant Education as Evaluated by O. F. Bollnow

広 岡 義 之

要 旨

本稿ではまず西洋教育思想史の観点から、レーブレ (Albert Reble, 1910～2000) によってフレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782～1852) の幼児教育思想がどのように把握されているかをまず概観する。そのうえで、具体的に主としてボルノーがフレーベルの教育思想をどのように理解したのかを論究していくことにする。その際、特にフレーベルの幼児教育論を中心に論が展開されていくことになるだろう。

キーワード：フレーベル、恩物、レーブレ、「カイルハウ小冊子」、ボルノー、幼稚園、「遊戯 (Spiel)」、『人間の教育』、「教育は追隨的であるべき」、万有在神論

はじめに

本稿ではまず西洋教育思想史の観点から、レーブレ (Albert Reble, 1910～2000) によってフレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782～1852) の幼児教育思想がどのように把握されているかをまず概観したうえで、その次のステップとして、具体的に主としてボルノーがフレーベルの教育思想をどのように理解したのかを論究していくことにする。その際、特にフレーベルの幼児教育論を中心に論が展開されていくことになるだろう。レーブレもボルノー (Otto Friedrich Bollnow, 1903～1991) もともに、精神科学的教育学に即しつつ解釈されたフレーベル論という点で共通項を有している。

第1章 フレーベルの来歴と基本的な思想的特徴

第1節 フレーベルの来歴

ここでは、まず初めに卓越した西洋教育思想史家レーブレおよびボルノーのフレーベル研究に従いつつ、フレーベルの来歴について概観しておこう。レーブレ自身は、精神科学的教育学の視点から西洋教育思想通史を研究しているところにその特徴が見られる。彼の基本的立場

は、人間の全体的・具体的把握であり、具体的な生活世界の記述を通して教育を解明しようとする点にある。(①訳者あとがき、568頁参照) によって本論文では、同じく精神科学的教育学の立場に立つボルノーのフレーベル解釈と同じ方向性を向いているので、レーブレのフレーベル理解を紹介することが適当であると判断した。

きわめて包括的かつ独創的な教育論で世界に対して多大な貢献を果たしたフレーベルは、おそらくペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746～1827) と並んで最も重要な教育者であると言っても反対する者はいないだろう。思想的には神秘思想にやや傾き、宗教的・有機的世界像が思想全体を貫徹している点において、フレーベルはロマン派に位置づけられているものの、人間的には極めて实际的で精力的に活動したので「ロマン主義者」とは言えないとのレーブレの指摘は筆者にとって興味深い。フレーベルの人間理解として、生命一般は深い宗教的畏敬の念によって満たされており、子どもを神的植物と捉えていたため、教育者は子どもに光と養分を提供する庭園師として把捉されていた。(①Vgl., S.231. 311～312頁参照) そうした教育者フレーベルの来歴を以下で簡単に鳥瞰しておきたい。

●教師を天職として見出した青年時代

1782年、ドイツのテューリンゲンにあるオーバーヴァイスバッハに生まれたフレーベルは、幼少時より自然に深い愛情を寄せていた。彼の父はプロテスタント教会の牧師であった。フレーベルは苦渋に満ちた青春時代を送りつつ、職業も測量技師、農事秘書、建築士と転々と経験することになる。その間にイエーナ大学に学ぶものの、すぐに退学してしまう。しかしその後、ペスタロッチ式の模範学校の校長、グルーナーと知り合ったことがきっかけで、教師という生涯の天職を見出すこととなる。(②Vgl., S. 107. 43頁参照)

1805年 (23歳頃) には教師として活動を開始し、1805年、1806年、さらに1810年にイフェルテンにペスタロッチを熱心に訪ねているが、ただペスタロッチの機械的な方法論には批判的であったという。1811年 (29歳頃) から1816年 (34歳頃) まではゲッティンゲン大学とベルリン大学で自然研究と言語研究をおこなっている。(①Vgl., S.231. 312頁参照 ②Vgl., S.108. 43頁参照)

1813年から1814年の間、フレーベルは、ルートヴィヒ・ヤーン (Friedrich Ludwig Jahn, 1778～1852) とともにプロイセンの軍人、リュッツォー (Adolf Freiherr Lützow, 1782～1834) の狙撃兵として解放戦争に参加した。その後、1817年 (35歳頃) に、ルードルシュタットの近郊カイルハウに、「カイルハウ一般ドイツ人教育施設」を創設したフレーベルは、ここで集団生活、簡素な暮らし、自然との直接的触れ合い (散策、庭作り、動植物の世話)、日常の仕事 (木工細工等)、芸術等を実践した。これらは後の田園教育舎運動の萌芽でもあったが、フレーベルの場合には明確に宗教的に根拠づけられた包括的な教育哲学が存在していた。元来、田園教育舎運動とは都市を離れて田園に学校を設立して真の教育を施そうとする運動で、

リーツが初めて1898年にハルソ山地のイルゼンブルクに学校を作ったことに端を発する。(① Vgl., S.233. 313頁参照)

●「カイルハウ小冊子」を執筆し始めた壮年時代

ベルリン大学助手の席を放棄したフレーベルは、グリースハイムに彼自身の学校を設立した。翌年の1817年（35歳頃）にはその学校はカイルハウに移され「カイルハウ一般ドイツ人教育施設」と呼称されることになる。1820年以来、フレーベルは教育上の思想を小冊子のシリーズに掲載し始めたが、今日ではそのほとんどが「カイルハウ小冊子」と呼ばれている。1826年（44歳頃）にフレーベルはそれらの小冊子をもとに総括的な主著を出版することとなる。その全タイトルは『人間の教育、教育と教授と指導の学、カイルハウの一般ドイツ人教育施設において努力され、その設立者、創始者及び校長であるフリードリッヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベルによって書かれた。第一巻、前期少年時代まで』となっている。続編である第二巻は生涯、出版されなかった。その後、数年間フレーベルは、カイルハウの協力者たちとともに、スイスで教育活動を展開し、ブルクドルフの孤児院を含めた数個の分校を設立した。(② Vgl., S.108f. 44頁参照)

●恩物の考案、幼稚園創設、『母の歌と子守唄』完成とフレーベルの政治的迫害

この後、フレーベルの内面では、じょじょに幼児教育への関心が深まっていき、その結果、幼児の活動欲求を適切に導く手段としての「恩物」（遊戯道具）が考案されることになる。1838年（56歳頃）以降、フレーベルは一連の小冊子に、「恩物」の正しい使用法を掲載していくことになる。スイスより戻ってからは、カイルハウ近郊テューリンゲンのブランケンブルクに遊戯施設と保護士および保母（保育士）の養成所を開設した。ここからやがて1840年（58歳頃）「児童の活動欲の養護のための模範施設」としての「幼稚園」（子どもの園）が世界で初めて誕生することになる。(②Vgl., S.109f. 45頁参照)

1840年にカイルハウ近隣に、模範施設である「一般ドイツ幼稚園」を創設したフレーベルであったが、残念なことにこの一連のフレーベルのユニークな活動が、後にドイツで民主主義的変革の嫌疑をかけられ政治的迫害を受けることになる。それにもかかわらずフレーベルの「幼稚園」（Kindergarten）という言葉は、世界の多くの国々で翻訳不可能な外国語として全世界に伝播して、現在に至るまで、彼の創設した幼稚園や恩物の影響力はまことに強いものがある。こうして1840年という年は、教育学的に制度としての幼児教育誕生という特別に記念すべき年となるとボルノーは明言している。参考までに付け加えると、フレーベル自身、自ら「幼稚園」を設立した意図は、子どもたちがいかなる妨げもなしに子どもたちの内面的な法則で成長していくことのできる場所を確保することであったと述べている。(③227頁参照)

年齢の若い幼い子どもたちのために1844年（62歳頃）に『母の歌と子守唄』がフレーベルに

よって完成された。こうしてフレーベルの晩年は彼自身の思想の普及拡大のために講演等で多くの時間を旅行生活に充てることとなる。先にも述べたように、彼の大きな心痛は1851年（69歳頃）に幼稚園が王制復古の体制のために、民主的傾向にあるという嫌疑で禁止されたことであった。1860年にはこの理不尽な禁止は解除されたものの、フレーベル自身はその事実を知ることなく1852年、闘争中にこの世を去ることとなる。（②Vgl., S.109. 45頁参照）

第2節 西洋教育史家レーブレが強調するフレーベルの基本的な思想的特徴

●自然・人間・神の三者は一つの神全体が表現されたもの

レーブレに従えば、フレーベルは全ての個別現象には同一の神的生命が現れており、万物の根底には同一の法則が存在するという。すなわち、自然・人間・神の三者は一つの神全体が表現されたものとされ、そしてそこから統一性と多様性が対立することになる。それは世間一般では「対立」と表現されるが、フレーベルにあってはシュライエルマッハーやゲーテ等の場合と同様に、真の「対極性」として理解されるべきであろう。その意味でフレーベルの思考は「弁証法的」とであるとさえ言われている。（①Vgl., S.232. 313頁参照）

たとえばフレーベルは幼児教育において、ボールが持つ重要な意義を以下のように捉えている。すなわち球体やボールは万物の根本原則であり、まとまりと多様性の対極性を表現しているという。球体は多面へと拡大し、万物のうちでもっとも簡潔な物体であり、面と角の数が無限に増大する。それゆえ、球体は最大のまとまりであり最大の多様性であり、これが宇宙の原理であるとフレーベルは考えていた。（①Vgl., S.232. 313頁参照）

●「教育は追隨的であるべき」（フレーベル）との考え方の根拠

フレーベルの主著『人間の教育』は、第一部しか出版されなかったものの、そこでは教育と授業を包括的・哲学的に解釈し、天才的直観で子どもの発達に関する深い理解を提示した。万物の最高の使命は神を啓示すること、つまり、有限の中で無限を表現することであった。それゆえフレーベルにあっては、人間と自然が神的全体に根源を有することを子どもたちに自覚させること、さらに彼らを指導する中で自己の生を「生の合一」に到達させることが重要な課題であった。生は根源的に善であるがゆえに、個々人の「自由は自発性と自律」が支配しなければならず、そこから有名な「教育は追隨的であるべき」との考えが生じた。教育はだからこそ規定的、要求的になることが許されない根拠を私たちはここに見出すのである。（①Vgl., S.233f. 315頁参照）

●教師は子どもの中に生成するものに対して畏敬の念を表さなければならない

フレーベルの教育論を考える場合、まず彼の仕事観を押さえておくことが肝要であろう。フレーベルにとって仕事とは宗教的なものとして理解されており、したがって仕事とは天罰でも

なければ必然的悪でもなく、むしろ何か神聖なものであり礼拝として捉えられていた。そこでレーブレは言う。フレーベルにとって「仕事なき宗教は単なる夢想に過ぎず、逆に宗教なき仕事は機械的活動であり品位を喪失したものに過ぎない。」(①S.234. 315頁)と。

レーブレはさらに続けて教師の使命についても次のように述べている。「教師は、ますます無限存在の新しい啓示として生徒の中に生成するものに対して畏敬の念を表さなければならず、生徒〔子ども〕のために外面的な模範をけっして示してはならない。(中略)教師は生徒〔子ども〕の上に立ってはならず、生徒〔子ども〕に自分自身の人間存在に合わすように要求してはならない。」(①S.234. 316頁)と。

レーブレはこれとの関連でボルノーの以下の言説を引用している。「フレーベルは『重要な教育の根本原則を表明した。すなわち子どもを教師と結び付ける教育的関係は単にこれら両者間だけの人間関係ではなく、両者を覆う一つの精神的世界から初めてその根拠を確保し得るのである』(ボルノー)」(①S.234. 316頁)と。私見であるが、レーブレのこのボルノーの言説引用から理解できることは、ボルノーにとってフレーベルの思想は、精神世界からアプローチして初めて真の解釈が可能になるということである。

●「遊戯 (Spiel)」は深い生命的意味と優れた教育的価値を持つ

フレーベルにとって幼児期(2歳から6歳)は特別に定まった方法で自己や世界に取り組んでいるという。それが「遊戯 (Spiel)」である。レーブレはその点について次のように語っている。「遊び〔遊戯〕は現在に没頭し、気持ちを緩め、それにもかかわらず、やはり全力を振り絞って専心している全く真剣な行動である。(中略)この場合に遊び〔遊戯〕は深い生命的意味と優れた教育的価値を持つ。遊び〔遊戯〕の思想でフレーベル以上にこの点を探求した教育学者はおそらく他に誰もいない。」(①S.235. 317～318頁)と。

さらにフレーベルは、遊戯について次のように理解していた。すなわち、幼児期の子どもの遊びは、将来の生活全体の「子葉」であり、最も内面的なものの開示であり、その後の人間存在の事前教育であり、予行演習であった。遊戯は内面的なものを自由に直接表現して、幼児のための内的くつろぎを提供するものであった。(①Vgl., S.236. 318頁参照)

第3節 ボルノーにおけるフレーベルの幼児教育論

●フレーベルの主著『人間の教育』の冒頭の内容の重要性

ボルノーによれば、幼稚園の創始者フレーベルはロマン派中期の世代の人物で、ノヴァーリス(F. von H.Novali, 1772～1801)やフィヒテ(Johann Gottlieb Fichte, 1762～1814)、シェリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775～1854)等の詩人や哲学者のグループの影響を受けていた。1813年から1815年の解放戦争の間に、当時の教育改革運動とかかわりを深め、最終的に教育者として生き方を選択していったのである。先述したとおり1816年にフレー

ベルは、「カイルハウ・ドイツ国民教育施設」という学校を創設し、そこでの教育実践を踏まえて、1826年には主著『人間の教育』が誕生した。厳密には「少年時代初期まで」の第1巻のみが完成しただけで、第2巻は最終的に刊行されなかったことからフレーベル自身の関心は、青年期よりも幼児期に限定されていたと言っても過言ではないだろう。(③222～223頁参照)

ここで重要な点はボルノーも指摘しているように、フレーベルは比較的晩年になってから初めて幼児教育の問題に深く関わっていったという事実である。カイルハウでの仕事と『人間の教育』の叙述が、全人教育の総括的な内容であるが、その中で初めて幼児の特殊な教育も適切な位置を占めることになる。(②Vgl., S.110. 46頁参照)

●『人間の教育』の冒頭の有名なことば

フレーベルの主著『人間の教育』の冒頭の有名なことばを直接引用してみよう。「万物の中には一つの永遠法則が安らぎ、作用し、支配している。この法則は外界すなわち自然においても、内界すなわち精神においても、また内外両界の統一体としての生においても、次のような人間には常に一様に明白にかつ規定的に自己表示したし、また現在も自己表示する。すなわち心情と信仰から、それ以外にはあり得ないという必然性によって充たされ、吹きこまれかつ生かされている人間か、ないしは明白にして冷静な心眼をもって外界において、また外界を通して内界を直観し、かつ内界の本質から外界が必然性と確実性とを伴って生じているのを洞察する人間には、この一なる永遠法則は姿を現わしてくる。万物を支配するこの法則の根底には、万物に作用し、自ら明白な生きた統一体が必然的に存在する。(中略) この統一体が神である。万物は神性すなわち神から生じている。また神性、すなわち神によってのみ規定されている。神には万物の唯一の根源が存在する。」(②S.120. 48頁：なお訳者の岡本英明はここでは岩波文庫訳を参照している)

●『人間の教育』冒頭の文章の二つの特徴

ボルノーによれば、この冒頭の引用文にフレーベルの世界観と人生観のすべてが語り尽くされているという。まず「万物の中には一つの永遠法則が安らぎ、作用し、支配している。」であるが、これこそがフレーベルの全人生観の核心を示している。第一の特徴として、フレーベルは単語、動詞を重ねて二つ、三つを並列して使用することが多いという。「一つの永遠法則が安らぎ、作用し、支配している。」あるいは、その直後の「必然性によって充たされ、吹きこまれかつ生かされている」等の表現がそれに当たる。こうした単語の積み重ねは、当時のロマン主義の思考法に共通するものであり、特にヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770～1831) の弁証法の図式を思い浮かべることができるだろう。そこでは概念の統一が正、反、合の三幅対に分かれているのだが、ただしフレーベルの場合、これがいつも三幅でなく、二幅あるいはときに四幅と不統一になっている。(②Vgl., S.121f. 50～51頁参照)

第二の特徴として、フレーベルの使用する言葉には外来語が存在しないという点である。彼の哲学的思考はほとんどもっぱらドイツ語で行われ、ドイツ魂の保持が志向されている。これもまた当時の時代の動きと呼応しているものである。(②Vgl., S.122. 51頁参照)

●外界は内界への連関においてのみ存在する

次にフレーベルの冒頭の言葉、「この法則は外界すなわち自然においても、内界すなわち精神においても、また内外両界の統一体としての生においても、次のような人間には常に一様に明白にかつ規定的に自己表示したし、また現在も自己表示する。」について考察していこう。ボルノーにしたがえば、外界は内界への連関においてのみ存在するという。つまり、外界はこの内界の外界なのである。前期ロマン派の代表者の一人であるノヴァーリスの思想のように客観的観念論の意味で、自己（自然）自身に内在する精神の外界がフレーベルにあっては喫緊の問題なのである。この連関でフレーベルは「本質」「精神」「諸物の神性」という言葉を使用しており、その意味で内外両界を統一するものこそが「生」(Leben)なのである。自然はそれに内在する精神的なものと一緒になってはじめて外界として、つまり精神の「表現」として現れる。逆に言えば、私たちの世界の精神もまた、外界において表示されるかぎりにおいて現れるとフレーベルは確信していたのである。(②Vgl., S.123. 53頁参照)

●フレーベルの神理解は「万有在神論」である

冒頭の文章で触れられているフレーベルの「永遠法則」とは、万物を包み統一的法則性を規定するものこそが神であるというフレーベルの確信に由来している。「神は万物の絶対的な生きた統一である。」と言われる所以である。この神的統一を認識する方法は二つあり、一つは人間の直接的信仰からの道であり、もう一つが哲学的な知識からの道である。(②Vgl., S.124. 54頁参照)

フレーベルのこうした神理解は「万有在神論」(Panentheismus)と呼ばれており、ボルノーによれば、以下の点で「汎神論」(Panteismus)と区別されるべきである。オランダのユダヤ系哲学者のスピノザ(Baruch de Spinoza, 1632~1677)に代表される「汎神論」である「神即自然」は神と現実が等置される。しかしフレーベルの神理解である「万有在神論」では、神性としての現実と神とは区別されている。その意味で純粹の原始キリスト教の教えと一致していることになる。厳密な区別としてはこのようになるが、ボルノーはロマン主義哲学全般としてのフレーベルの形而上学的構想から見れば汎神論と呼んでも差し支えないとも指摘している。(②Vgl., S.125. 56頁参照)

第4節 フレーベルの「労作教育」の教育学的意義

●人間の課題は自己の精神を表出すること

ボルノーによれば、フレーベルにあっては自然の中のすべての個体はこの神的法則の表現であり、個体の本質自体が精神の象徴であるという。そこで教育の課題とは、子どもたちにこの深長な意味を把握させ、外面的なものを内面化することである。フレーベルが考える人間の課題として、一回限りの個性的な形姿によって自己自身の内に存在する精神を表出することであり、神的なものを自らの内に実現することであるとする。換言すれば、すべての内的なものを外的にすることが人間の課題であるとフレーベルは確信していた。(③224頁参照)

それとの関連で、外面的に実現する手段は「労作」である。手を使用する「労作」、身体を使用する「労作」、職人的な仕事の意味での「労作」、これらすべてがフレーベルの体系で重要な働きをなす「労作」である。(③225頁参照)

●フレーベルにおける「労作」の三つの特徴

その際、三つの特徴があるとボルノーは鋭く指摘する。第一に教育は本質的に後からついていくものであるという特徴である。すなわち、子どもは植物のように内的な有機的法則によって成長していくものである。それゆえ教育者は、子どもの成長が内面的法則にしたがって進められるためにも、子どもの行く手にふさがり障害物を除去するだけでよいことになる。これはまさにルソーの「消極教育」の思想の再現とも言えるだろう。(③225頁参照)

第二の特徴としてフレーベルは、子どもを善なる存在として捉えている。それゆえ、大人は決して外から強制してはならず、むしろ子どもの発達が熟するまで待つ必要がある。フレーベルは子どもの内に小悪魔を見出そうとする疑い深い教師に対して厳しい態度で批判する。とはいえフレーベルは教育において極めて現実的であり、決して悪を否定しているわけではない。ただ人間の本性が善であり悪ではないというのがフレーベルの信念なのである。(③226頁参照)

第三の特徴は以下のとおりである。すなわち、子どもの内に存在する欠陥を克服するために、厳しい規則で対処しても決して解決しないという教育者としての信念をフレーベルは堅持していた。つまり、大人は子どもの欠陥や欠点に対して忍耐強く思慮し、過ちがどこからやってくるのかを探し、その根本から欠陥のある子どもの発達を無垢な状態に戻すことによってのみ解決するとフレーベルは考えていたのである。(③226頁参照)

●労作教育は宗教教育へと接近する

ボルノーによれば、フレーベルは、外的仕事の実現を通して初めて自己の本質を認識すると考えた。つまり、外界の内化において自己自身が発見されるのであり、これはフレーベルのいわゆる「分離と再統一の弁証法的な関係」である。(②Vgl., S.128. 61頁参照)

こうした理由のためにフレーベルは外的仕事としての「行為への教育」あるいは労作教育、

さらには肉体労働の教育を特に重要視した。ボルノーの見解にしたがえば、フレーベルは、当時の家庭教育も学校教育も、ともに子どもたちの身体を十分に活発にしていなかったと強く批判し、仕事に対しても怠け癖がついていて、そのために人間の無限の力が発揮されていないと嘆いていたという。(②Vgl., S.129. 62頁参照)

さらにフレーベルが身体的労作を重要視したのはパンと衣服を得るためではなく、子どもの精神、子どもの内に秘めた神性を外部に形成するためであった。つまりフレーベルは労作という外的表現を通して自己を再発見できると考えた。その意味で労作は職人の教育だけでなく、あらゆる人間教育の不可欠の要素であると捉えた。そしてついに労作への教育は、究極的に宗教教育へと接近するのである。「労作と宗教は同時的である」あるいは「精励と勤勉によって(中略)われわれは真に神に近づく」と言われる所以である。(②Vgl., S.130. 63～64頁参照)

こうしたフレーベルの幼児教育思想は比較的晩年になってから初めて深く考察された。当初フレーベルは学齢期の研究を展開したのだが、その後しだいに幼児の初期の段階の教育へと進むことになる。ボルノーはこうした変化には必然性があると指摘する。つまり前期ロマン派の代表者の一人、ノヴァーリスが指摘するように、一般的ロマン主義のいう「内面への道」と関連している。すなわち、教育学的に敷衍すると、ロマン主義の影響を受けたフレーベルにあっては、究極のところ、人間の発達の純粹無垢な根源に戻ることこそが最重要課題であるという視点から、幼児教育が晩年のフレーベルの究極的な教育課題となったのである。(③227頁参照)

第5節 フレーベル幼児教育思想とボルノー「新しい庇護性」概念の関連性

●フレーベルの「生命の革新」概念は、ボルノーの「若返り」概念と共通する

豊泉清浩によれば、ボルノーの「若返り」概念は、フレーベルの「生命の革新」概念と共通項を有する。つまり、フレーベルの「生命の革新」の思想は、ボルノーの根源への回帰を示唆するものであり、危機を乗り越えるための方途であり、実存主義克服の方向性を含み持つために「新しい庇護性」の思想の要素の一つとなるという豊泉清浩の指摘は興味深い。(④60頁参照 ⑤247頁参照)

さらに豊泉清浩によれば、フレーベルのキリスト教理解には、ボルノーの主張する「庇護性」の特徴が散見できるとし、調和的な家庭生活は神と世界によって庇護されているところに存在すると考えている。それゆえ豊泉は、フレーベルの宗教観とボルノーの「存在信仰」とは同根であると捉えている。さらにボルノーは、フレーベルにおける神・自然・人間の調和的關係が、庇護性の感情の根拠となっていると捉えている。(④61頁参照 ⑤249頁参照)

●フレーベルの「幼稚園」は「庇護された空間(ボルノー)」の現実的モデルである

ボルノーは、フレーベルの宗教観はイエスの純粹な教えに従っており、家庭生活の中にこそ真の信仰が実現されるべきものと把握する。それゆえボルノーはフレーベルのキリスト教理解

の内に信仰の自然的形式を見出していた。換言すればボルノーはフレーベルが世界で初めて創設した「幼稚園」こそが、庇護された空間の現実的モデルであるとさえ考えている。それゆえボルノーはフレーベルの幼稚園における母と子の関係、それを包摂する幼稚園の空間や庭を、「新しい庇護性」の思想の根拠と考えている。豊泉清浩によれば、さらにボルノーはフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』に「新しい庇護性」の思想を重ねていたと指摘する。つまり、フレーベルの主張する母と子、両親と子の信頼関係、庇護された家庭生活という教育原理こそが、ボルノーのいわゆる「新しい庇護性」概念の根拠となるという豊泉清浩の指摘は、従来までのボルノー研究ではあまり指摘されておらず、貴重なボルノー理解と言えるだろう。(④62頁参照 ⑤250頁参照)

●子どもは純粋に捉われずに直観する力を持っていない

ボルノーは高弟のギール (Klaus Giel, 1927～) の著『人間学的な教授法』の中で、子どもは事物に接するときにはまず表面的に理解された世界の中にいることを示している。子どもは物の扱い方を知っているし、目的に応じて物を使用する方法も知っているが、じつは真の意味で事物そのものを見ていないと鋭く指摘している。換言すれば、子どもは純粋にとらわれずに直観する力を持っていないという。なぜならこの能力は、日常生活においてすでにいつも省略されているからである。ドイツの哲学者ゲーレン (Arnold Gehlen, 1904～1976) はこの点を、人間はたとえば一つの特徴ある印等によってすでに物を見分けているという。(⑤246頁参照 ⑥Vgl., S.96. 88頁参照)

現象学者のフッサール (Edmund Husserl, 1859～1938) に従えば、あるがままの事実としては現実にはそう見えないはずのものを「負担軽減」の働きで、事実を飛び越して、自動的に判断してしまう場合があるという。事物についての既成概念が正直な知覚を前もって規制してしまい、純粋なままの感覚的事実を覆ってしまうことがしばしばあるとボルノーは指摘する。具体例として発展段階にある児童の絵の描き方にボルノーは注目して次のように言う。たとえば本来、机には四本の脚があるが、光学的にはそのうちの一本は見えないはずなのに、子どもたちの描く大半の絵には四本脚で描かれていることが経験上、よく知られている。この事例を解釈する場合、子どもたちの視覚が頭で知っていることをそのまま絵にしてしまう結果であると考えられる。(⑦116頁参照)

こうした事例からも、子どもたちにとっても、当初から純粋な直観などは存在せず、むしろ思考を省略する形での「負担軽減」の働きで、日常の接触があることが大半である。純粋でとらわれず、物をそのいつわりのない外見で捉える直観に達するためには、媒介となる習慣の層を突破することが大切である。こうした経験をするのは私たちにとって珍しく恵まれた瞬間だけであり、たとえば完全な芸術品を鑑賞するときにこうした経験はしばしば起きる。(⑥Vgl., S.97. 88頁参照)

●「フレーベルこそが、若返りの根底を知った最初の人である」(ボルノー)

ここに特別な教育の課題が存在する。直観は現実との交渉によってすでにいつも曇らされており、子どもたちを現実との交渉から救出し、直観するところへ連れ出し、始原の状態にまで導く必要がある。子どもの中に真の子どもらしさを発見することが教育の主要課題であるならば、人間を真に「若返らせる力」こそが、教育の究極的価値の一つとなるだろう。この過程において子どもだけが若返るのではなく、実は同時に教育者自身も若返るのである。フレーベルの「私たちは死んでいる。私たちの周囲のものは死んでおり、あらゆる知識は空しい」という趣旨の考えをボルノーは援用しつつ、フレーベルこそが、この若返りの根底を知った最初の人であるとボルノーは強調している。(⑤248頁参照 ⑥Vgl.,S.98f. 88～89頁参照)

それゆえに「父親たち、両親たち、子どもの生活を活気づけ、私たちの生活へと呼び戻そう」と主張するフレーベルは、自己への根源の復帰を絶えず求めているのである。ここで初めて、「子どもたちによって私たちは自分を生かそう」というフレーベルのスローガンの意味が明確になるのである。すなわち、大人自身が子どもとの触れ合いによってのみ若返り、その生命の始原に戻るができるのである。(⑥Vgl.,S.99. 90頁参照)

註

本論文で引用・援用する文献の表記については、本文中に、()で①②等で示すこととする。その際、原書についてはS、訳書については頁で表記する。また本文中の〔 〕は筆者による補足説明である。

- ① Albert Reble (Hrsg.) *Geschichte der Pädagogik*, 20Aufl. Klett-Cotta, 2002.
アルベルト・レーブレ著、広岡義之訳・津田徹他訳、『教育学の歴史』、青土社、2015年。
- ② O.F.Bollnow, *Die Pädagogik der deutschen Romantik*, von Arndt bis Fröbel. Stuttgart,1952, 2. Aufl,1977.
ボルノー著、岡本英明訳、『フレーベルの教育学---ドイツ・ロマン派教育の華---』、理想社、1973年。
- ③ ボルノー著、浜田正秀他訳、『対話への教育---ボルノー講演集---』、玉川大学出版部、1973年。
- ④ 豊泉清浩著、「ボルノー教育思想におけるフレーベルの影響に関する一考察
—＜新しい庇護性＞の思想との関連において—」、日本ベスタロッター・フレーベル学会、『人間教育の探究』(11) 55～72頁所収、1998年。
- ⑤ 豊泉清浩著、『ヤスパース教育哲学序説---ボルノーからヤスパースへ：自己生成論の可能性』、川島書店、2001年。
- ⑥ O.F.Bollnow, *Anthropologische Pädagogik*, Tamagawa University Press, 1971.
ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、玉川大学出版部、1981年。
- ⑦ 広岡義之著、『ボルノー教育学入門』、風間書房、2012年。